

河野哲也・土屋陽介・村瀬智之・
神戸和佳子・松川絵里著

『この世界のしくみ 子どもの哲学 2』

毎日新聞出版 2018年4月 四六判 184頁 ￥1300円(税別)

永井玲衣(上智大学)

本書は、2015年に刊行された『子どもの哲学 考えることをはじめた君へ』の続編である。前書と同様に「毎日小学生新聞」で連載されている「てつがくカフェ」を加筆修正したものであり、小学生の子どもたちが実際に抱いた問いに、哲学者たちが「共に考える」仕方でそれぞれの応答を試みている。哲学者たちはコーノさん、ツチヤさん、ムラセさん、ゴードさん、マツカワさんの5名であるが彼らはいずれも、様々な場で実際に哲学を「実践」しているプラクティショナーでもある。だが、彼らは決して子どもたちに明確な「答え」を提供することを目的としない。それは、哲学者メンバーの一人「ゴードさん」の書く「はじめに」でも明らかである。「この本には『この世界のしくみ』という題名がついています。でも、世界のしくみを詳しく教える本ではありません。この本を読んでも、新しい知識が身についたり、わからないことがわかるようになったりはしません[……]さまざまな謎について、あなたと一緒に哲学する本です」(pp.1-2)。哲学者たちはこうした基本的スタンスを崩さないようにしつつ、それぞれの見地から探究を行っており、子どもたちをさらなる探究の道へと誘っている。

1章は日常の中にふとわき起こる「ふしぎ」をテーマにした章であり「どうして朝は来るの?」「仲間って必要なの?」などが取り上げられている。2章では「多数決で決めてはいけないことは?」など社会のしくみを問うもの、3章ではタイトルの通り「なぜ世界はあるの?」「数字はどうやってできたの?」など世界のしくみについての問いがまとめられている。さらに、各章の頭に「人間は考える葦である」など先哲の思想が、子どもたちの問いと同列の問いとして設定されてい

るのも特徴的だ。

前作は一つの問いに対し全員で応答していたが、今回からは1名増えたこともあり、交代で3名が異なる視点を提供をするため、バランス良く読み進めることができる。たとえば「男と女どちらが大変?」という小学生の問いに対し、コーノさんが「働く」という観点で女性の生きづらさについて言及し、続いてゴードさんが、男女それぞれの大変さについて触れる。そして最後にムラセさんが「そもそも、男女の区別って必要?」と読者に問いを投げかけるのだ。他にも「ふしぎが増えちゃったね」「あなたは、どう思う?」など、至る箇所読者の思考を促している。

こう見ると、哲学者たちは、大人から「唯一の正解」を「与える」仕方で子どもたちに応答することを拒絶していることが明確に分かる。では彼らは何をしているのか。それは「『本当のことが知りたい』と心から望んで」(p.180) 哲学をしているのである。知りたいという欲望が、読者に「君はどう思う?」と問いかけることを可能にする。「あとがき」には以下のようにある。「本当のことを本気で知りたいと思っているからこそ、お互いに相手の考えを参考にし合って、みんなで協力して考えをどこまでも深く掘り下げようとしています。哲学対話は、このような協力プレイを通して、参加者同士を独特の連帯感とお互いに対する敬意で結びつけるのです」(同上)。ここで分かるのは、読者を単なる「子ども」として見なすまなざしや、先生／生徒の二項対立図式が存在していないということである。彼らは、読者が大人であろうが子どもであろうが関係なく、読者を「協同探究者」として見なしている。「どう思う?」という問いは決してポーズや教育的配慮ではない。知りたいと思うからこそ、問うのである。

本書は、研究者が読むような専門的な哲学書ではない。だが、彼らのこうした態度こそ、まさに「哲学的」だと感じざるを得ない。気が付けば、哲学者らの知への愛によって私たちも「この世界のしくみ」について思いを巡らせてしまうことだろう。